

停電と蠟燭

関西大学 社会安全学部 小澤 守

先頃、母が100歳で天寿を全うし、通夜、葬儀とバタバタした直後、関東では台風15号（国際名：ファクサイ）が東京湾から千葉県を駆け抜けた。これを書いている今、台風通過から1週間近くが経つが、鉄塔倒壊、極めて多数の電柱や電線の損壊などのために、いまだ10万軒を超える家屋が停電状態にあるという。東京電力はもちろん全国の電力会社の協力を得て復旧に取り組んでいるがまだしばらくはかかりそうである。現在では停電になれば、オール電化家屋は当然として、そうでない家でも、ガスは利用できないし、電話も通じない。もちろん携帯電話の充電もままならないし、場合によっては基地局がダウンすることもあり、情報発受信さえできなくなることだってありうるのである。

筆者が子供の頃には、柱上トランスへの落雷によって停電し、あたり一面真っ暗になったことをよく経験した。真っ暗なのはなにも停電時に限ったことではない。そもそも田舎には街灯もなく、星や月の明かりがない時には真っ暗であった。思い出せば、24年前の阪神淡路大震災後に、損壊した新長田駅をバイパスして到着した鷹取駅から帰宅したおり、一面焼け野原の中を歩いたときも真っ暗であった。妙な高揚感とは裏腹に、周囲は本当に真っ暗であったのだ。

阪神淡路大震災の話はさて置いて、子供の頃の停電には、何か懐かしささえ覚える。当時、我が家にはガスはなく、炊飯は竈で、調理は炭火、風呂は今では見かけなくなった五右衛門風呂で、薪を燃料としていた。今でも実家には竈はあるし、父の残した木炭と母が残した薪が物置小屋に積まれている。実家に帰りつけさえすれば、筆者はかなりの程度まで子供の頃の生活が再現可能である。また各部屋には白熱電灯がぶら下がっていただけであった。ラジオは、真空管の数が何本の型だったかは定かでないが、花菱アチャコ、浪花千栄子の出演した番組が唯一の娯楽であった。台所などには徳用マッチが常備され、背戸を出たところには薪と火付け用の杉葉がうず高く積み、冬であれ夏であれ、停電があつたとしても明かり以外、全く影響がなかった。停電ではラジオも当然使えなかったが、キットを確か500円（当時の遠足のお菓子代は50～60円）で購入して組み立てたゲルマニウムラジオでイヤホンに耳に、もはや電流の流れていない電線をアンテナ代わりにして台風状況を聞いたときには、その内容よりもゲルマニウムラジオそのものの性能に感動したものである。明かりはといえば、神棚や仏壇あるいは台所に蠟燭がいつでもおいてあり、真っ暗の中でも容易に見つけることができた。

落雷などで停電になっても、蠟燭の明かりのもとで一家そろっての夕食と団欒があつた。そんなどこかノスタルジーを覚える原風景も、今でははるか彼方に消えてしまい、かろうじて記憶の中に残るのみとなった。

工業技術の発展のおかげで、現代では、電気によって食事、入浴など日々の生活の基本から情報、セキュリティに至るまですべてが制御されている。田舎でも都会でも状況が同じな

のは、すべてが電力依存の生活になっているからである。そのおかげで利便性が高く、かつ安全な生活を我々は享受しているが、一旦停電になると、それらはすべて失われるのである。我が家では、電気を失ったときに何一つ生活を支えるものがない状況を回避するため、阪神淡路大震災以降、カセットコンロと燃料ガス（LPガス）、懐中電灯などは常備している。ただ最も大きな問題としてあるのは、筆者自身にかつて田舎で暮らした折のような「耐力」がないことだろう。大震災直後に18リットル入りポリタンクを使って、給水車からバスタブまで何度となく運び水を張ったり、当時、お年寄りが2つのポリタンクに水を一杯もらって、筆者の顔を見てため息をついたのに気付いて、15階まで持ち上げたりしたあの体力は、残念ながら今はもうない。しかしかつて何度となく経験した停電を克服する心構えと最低限の準備だけはしておこう。

